

## 日本比較文化学会 第 57 回 関東支部例会 発表要旨

2022 年 12 月 18 日（日）(13:00~16:30)に東京未来大学 Zoom 会議室におきましてオンラインによる研究発表が行われました。今回も多方面から比較文化についての研究発表をして頂き、関東支部会員の研究に関する真摯な態度と熱心さが伝わった発表となりました。ここに発表要旨を掲載させていただきます。

### 「都市の規模による『意識高い系』文化の多寡」

前田悟志（中央大学文学部 兼任講師）

昨今、日本において広がりを見せているいくつかの潮流の一つに、先進的な意識や文化的態度が挙げられるだろう。例えば一般社会においては、SDGs への取り組み、多様性の包摂などのスローガンを目にするのが多くなり、消費文化においてもけして大勢ではないもののいわゆる「意識が高い」層が志向する製品・サービスというものがあらわれているというし、また、教育分野においては STEAM 教育などがそれにあたるだろう。

別の言い方をすると、後期近代的社会における消費文化は、一方的な受け身の消費活動のみならず、生産活動的な側面を併せ持つ消費活動が広まると言われている。生産活動の過程それ自体が生活の質を大幅に向上させる効果があることはこれまでも繰り返し指摘されている。それでは、受動的消費活動よりも生産活動的な消費活動の方がより優れた消費活動だという場合、そのような活動に興味を持てることはある種の恵まれた状況にあると考えられる。今回の調査で使用した「意識が高い」興味・関心の分野の項目は、そのような生産活動と消費活動の二つの側面を併せもつ。

こうした俗に「意識が高い」といわれる類いの意識や態度の広がりには国内に均一的に拡散しているのだろうか。それとも人々の興味・関心が向く分野というのは、G.ジンメルが流行論のなかで言及したように、大都市から周辺に向けて滴下（トリクルダウン）しているのだろうか。かつて一億総中流意識が国土を覆っていた時代と異なり、現在はこれらの意識の差も都市の規模によって隔たりがあるのだろうか。

本研究では、この問いへの示唆をえるため、消費と生産の両面を持ち、かつ一般的に意識が高いと思われるような分野にたいする興味・関心の多寡を東京圏と名古屋圏において比較した。使用したデータセットは、2021 年 10~11 月に首都圏で実施された量的調査で

ある。有効回答は 1,237 件（回収率 37.5%）。参考までの比較対象として名古屋都市圏においても同時期に実査がされており、こちらは有効標本 444 件（回収率 37%）である。

標本サイズの母集団にたいする比率が東京都市圏と名古屋都市圏で異なるため、分析手法上の制限はあるが、部分的に比較が可能になっている。調査項目には 8 つの興味・関心についての設問と、それらが主たる職業を通して実現しているか、あるいはそれ以外の場で実現しているかを問うた。単純集計においてはいくつかの項目で差がみられた。今回の報告では単純集計に加えて、属性項目なども考慮したより詳細な分析の結果も交えて総合的な可能性に言及する。

「ジャパニーズ・フラワーアレンジメント」発見の視座

ー コンドルのいけばな理論を中心に

Małgorzata Dutka

（荒川区立中央図書館）

日本固有のフラワーアレンジメントとして世界的に知られているいけばなを「発見」し、はじめて欧米諸国に紹介したのはイギリス出身の建築家ジョサイア・コンドル（Josiah Conder, 1852–1920）だとされている。花道史研究では、コンドルはいけばなの「線之美」に注目し、その著作において花道をアートとして客観的かつ学術的に考察したと評価されているが、その理論の全貌やいけばなのイメージ形成に及ぼした影響は未だに解明されていない。

本報告ではコンドルがいけばなを「研究」の対象とした経緯の検討を踏まえ、1889年に日本アジア協会の例会で行った発表（*The Theory of Japanese Flower Arrangements*）の内容やいけばなに関する著作（*The Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement* 1891、*Floral Art of Japan* 1899）を分析と比較の対象として、理論の特徴と推移を考察していきたい。その際、外国人による「日本研究」のあり方、日本文化の捉え方、欧米のフラワー・アレンジメント文化、あるいはジェンダーに対する認識などが重要なポイントになると思われる。

考察の結果、日本文化に関する情報を海外に発信していたコンドルの視座を明らかにし、現代に受け継がれてきたイメージの基礎を浮き彫りにすることができよう。

会話における割り込みの位置と言語行動遂行についての分析

張筱婷（宇都宮大学大学院博士後期課程）

会話における、割り込みは現に話者の話が終わらないうちに、別の話者が話し始めるといふ現象である。本研究は会話の割り込み発話を分析したものである。

会話分析の先駆的な研究である Sacks , Schegloff & Jefferson (1974)は「一度に一人が話す」発話交替のシステムとルールを指摘した。これによると、「割り込み」はルールに違反した現象である。日本語の割り込みに関する研究は、協力的・妨害的の両面を論じたものがよく見られる。しかし、割り込みが生じた後、話者がどのように言語行動を遂行するか、どのような言語調整するかについては十分に研究されていない。

そして、本研究はコーパスの会話データを用いて、割り込み発話に焦点を当て、日本語母語話者と日本語学習者の発話に着目し、割り込みの位置と割り込み後行為の遂行することを考察する。接触場面において、割り込みが起きやすい構造的な位置を明らかにする。また、発話の適切性と割りこまれた後発話行動の遂行について検討し、分類の明確化を目指す。具体的には、割り込みの失敗実例と成功実例の断片を抽出して、言語行動遂行を分類する。また、割り込みが生じた後、話題追従と引き継ぎ話題提供の可能性を検討する。本研究の結果を踏まえ、異文化コミュニケーションと会話分析に貢献したいと考える。

## 参考文献

Sacks H, Schegloff E&Jefferson G (1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn Taking in Conversation. *Language*, 50, 696-735

パール・バックが見つめた中国人女性

野田晃生(中国 河北外国語学院大学)

パール・バック(Pearl Sydenstricker Buck)は、米国で生まれ、幼い時に中国に渡り、中国において長く生活した作家である。彼女は、小説家として活動した。彼女の作品には、中国を舞台とした作品が多い。その代表作は、『大地』(“The Good Earth”)である。彼女は、1932年にピューリッツァー賞を受賞し、その後、1938年にはノーベル文学賞を受賞した。彼女は、中国人をよく観察したが、その中には中国人女性も含まれていた。本研究においては、バックが、中国人女性をどのようにとらえ、表象したか、について研究を行う。

食べ物の美味しさを表現する言葉の探求について

—北陸地方の郷土料理・伝統菓子を中心に—

長田 元（富山短期大学講師）

近年、地産地消やSDGsの関心の高まりから、日本の各地においてそれぞれの地域の食を食べる機会を増やしたり、観光に活かしたりする取組みが推進されている。その取組みの充実策として、多くの人食べ物の美味しさを共有することが挙げられるが、郷土料理・伝統菓子の美味しさを明らかにした研究は少ない。このため、本研究では郷土料理・伝統菓子の美味しさを表現する言葉にどのような特徴があるかを明らかにすることとした。

本研究では富山県の「富山湾鮎」及び石川県大豆飴を対象に筆者が所属する教育機関の学生及び教職員計75名に食べてもらい、美味しさを表現する言葉を選定頂いた。75名のうち富山湾鮎については64名から、大豆飴は61名から回答があった。

「富山湾鮎」では、視覚から捉えた美味しさの表現が多く認められた。「海の宝石」、「玉手箱」といった食べ物以外のモノを用いた表現が認められた。他方、「富山の郷土の味」といった五感による分類が難しい表現も認められた。大豆飴では、「ほのかな甘みがあった」といった味覚に関する表現が太宗を占めた。

本研究では、「富山湾鮎」及び大豆飴の魅力、様々な比喩表現や郷土への想いなど、言語表現の多様性が明らかになった。加えて殆どの参加者が「富山湾鮎」を食べて、富山県の地域を発展させたり、食文化を大切にしたりすることが重要であると認識した。地産地消や富山県産の食材への理解向上や地産地消にもつながると考えられる。これらの表現は文化の継承の観点から重要なものである。

食べ物の美味しさに関する表現が多くなれば、より多くの情報を残し伝承していくことにつながる。郷土料理・伝統菓子のおいしさの表現は料理や菓子がもつ美味しさ以上の要素、郷土や比喩を表現するものであった。郷土料理・伝統菓子は通常の食べ物以上の感情を人に与えるものである。

## Sri Lankan Appropriation of the Japanese Sport Karate

Petra Karlova, Palacky University カルロヴァー・ペトラ（パラツキー大学）

Karate is martial art that is Japanese cultural product. It was developed from Okinawan martial art *todi* 唐手 that was introduced to Tokyo in 1922 by Funakoshi Gichin. It was Japanese and sportified in order to fit the Japanese concept of modern martial arts *Budo* 武道. The transformation also included the change of the art name into *karate* 空手.

After establishing in mainland Japan, karate spread abroad during Japan's expansion in Asia and also reached Sri Lanka. In Sri Lanka, G. A. T. Livera is called father of karate that trained under Malaysian martial artist Chew Choo Soot who learned karate from a Japanese officer from 1942 and established

karate style Budokan in Malaysia. Livera opened his dojo in 1966 and is also known for founding All Ceylon Karate Federation in 1975 (present Sri Lanka Karate-do Federation). Following Budokan Style, Shotokan, Shito, Goju, Wado and other styles were introduced by various karate masters including Japanese. Now karate is very popular in Sri Lanka.

Ruthie Kotek argued that Japan Karate Association has made effort to transmit karate as a Japanese cultural product with the features of Japanese-ness. Therefore, it is interesting to see if there is any hybridization in Sri Lankan appropriation of the Japanese karate. This research aims to analyze the Japanese and Sri Lankan elements in the sport karate in Sri Lanka. For this purpose, interviews with the Sri Lankan karate instructors and participant observation were conducted.